

平成 27 年度

病害虫発生予察情報

第9号

8月予報

北海道病害虫防除所 平成 27 年7月 28 日

<http://www.agri.hro.or.jp/boujoshou/>

Tel:0123(89)2080・Fax:0123(89)2082

季節予報（付記）によれば、8月の天気は数日の周期で変わりますが、平年に比べ晴れの日が少なくなり、降水量が多い確率と平年並の確率がそれぞれ 40%と予報されています。

これまでの発生状況と季節予報から、多めの発生が予想される病害虫は、水稻のいもち病、豆類の灰色かび病、茎疫病（大豆・小豆）、マメシンクイガ（大豆）、アズキノメイガ（小豆）、ばれいしょの疫病、あぶらな科野菜の軟腐病、モンシロチョウ、コナガ、りんごのモモシンクイガです。

8月に注意すべき病害虫

作物名	病害虫名	発生予想		注意事項および防除対策
		発生期	発生量	
水稻	いもち病	（葉いもち） 平年並（既発） （穂いもち） やや遅	（葉いもち） やや多 （穂いもち） やや多	穂いもちに対する出穂期散布は必ず実施する。耐性菌発生リスクを高めないために、薬剤の選択に注意する。 葉いもちの発生が多く出穂期間が長引く場合には穂が完全に揃うまで散布を継続する。
水稻	アカヒゲホソミドリカスミカメ	並（既発）	並	本種に対する重要な防除時期である。 水稻の生育はやや遅れている。防除の適期実施に留意する。
ばれいしょ	疫病	早（既発）	やや多	初発後は急激にまん延するので、散布遅れにならないよう注意する。予察情報や気象情報を活用し、適切な防除を実施する。
てんさい	褐斑病	やや遅（既発）	並	薬剤に対する低感受性菌や耐性菌の発生が認められているため、薬剤の選択には特に注意する。散布間隔が開きすぎないように注意する

A. 水稻

いもち病（葉いもち）	発生期：既発（並）	発生量：やや多
（穂いもち）	発生期：やや遅	発生量：やや多

1. 発生経過と予報の根拠

- (1) いもち病は弱い雨が長期間続いた場合や、寡照によって水稻の抵抗力が低下すると多発しやすい。
発病適温は 20～25℃であり、最低気温 16℃以上で発病の危険がある。
- (2) 各予察田の「きらら 397」における葉いもちの初発期は、比布町では7月 11 日（平年：7月 14 日）と平年よりやや早く、岩見沢市では7月 21 日（平年：7月 23 日）、北斗市では7月 13 日（平年：7月 15 日）と平年並であった。葉いもちの発生量は、岩見沢市および比布町では平年より少なく、北斗市では平年よりやや少なく推移している。
- (3) 7月 3 半旬の巡回調査では、一般田において葉いもちの発生は確認されていない。
- (4) 葉いもち初発予測システム「BLASTAM」によると、7月中旬から下旬に広い範囲で感染好適条件となった日が数回にわたり出現している。
- (5) 水稻の生育は平年よりやや遅れており、出穂もやや遅れると考えられる。
- (6) 8月の気温は平年並で、降水量は平年よりやや多いと予報されている。
- (7) 以上のことから、葉いもちの発生量は平年よりやや多く、穂いもちの発生期は平年よりやや遅く、発生量は平年よりやや多いと予想される。

2. 防除対策

- (1) 穂いもち防除は出穂期の1回散布を基本とするが、葉いもちの発生が多く出穂期間が長引く場合には、散布間隔を1週間程度として穂が完全に揃うまで散布を継続する。
- (2) 多湿条件が続くと急激にまん延することがあるので注意する。
- (3) MB I-D剤およびQo I剤を茎葉散布する場合には、耐性菌発生リスクを低減するため防除ガイドに準拠して使用する。

ウンカ類	発生期：既発（ヒメトビウンカ第2回：並）	発生量：並
-------------	-----------------------------	--------------

1. 発生経過と予報の根拠

- (1) ヒメトビウンカは高温少雨条件が続くと密度が高まりやすい。セジロウンカは道内で越冬できず、大陸や本州以南から飛来して、8月中旬以降の飛来成虫は水田への定着率が低いとされている。
- (2) 予察灯によるヒメトビウンカ第2回成虫の初誘殺は、長沼町で7月12日（平年：7月14日）、比布町で7月18日（平年：7月13日）、北斗市で7月15日（平年：7月28日）であった。予察灯によるセジロウンカ成虫の誘殺は北斗市でのみ認められ、初誘殺は7月17日（平年：7月30日）である。誘殺頭数は半旬で2頭と少ない。
- (3) ヒメトビウンカ第2回成虫の発生量は、予察田のすくい取り調査において比布町では平年より少なく、長沼町、北斗市では平年並である。予察灯による誘殺数は、長沼町では平年並で、比布町、北斗市では平年よりやや多く推移している。
- (4) 8月の気温は平年並で、降水量は平年よりやや多いと予報されている。
- (5) 以上のことから、発生量は平年並と予想される。

2. 防除対策

- (1) 多発による被害が予想される水田では、防除ガイドに準拠し、カメムシとの同時防除を実施する。
- (2) 吸汁害が発生するのは、7月下旬以降の第2回成虫発生時に株当たり寄生頭数が50頭（20回振りすくい取り換算頭数で成虫1,800頭または幼虫900頭）以上の激発となった場合である。

アカヒゲホソミドリカスミカメ（第2回）	発生期：既発（並）	発生量：並
----------------------------	------------------	--------------

1. 発生経過と予報の根拠

- (1) 本種は高温少雨条件が続くと密度が高まりやすい。
- (2) 予察灯による第2回成虫の初誘殺は長沼町で7月5日（平年：7月8日）、北斗市で7月11日（平年：7月15日）と平年よりやや早く、比布町で7月17日（平年：7月13日）とやや遅かった。
- (3) 誘殺数は長沼町、比布町では平年並で、北斗市では平年よりも多い。
- (4) 7月3半旬の巡回調査によると、畦畔すくい取り調査で多発生の目安となる第2回成虫の捕獲頭数23頭を超えた地点は認められなかった。
- (5) 8月の気温は平年並で、降水量は平年よりやや多いと予報されている。
- (6) 以上のことから、第2回成虫の発生量は平年並と予想される。

2. 防除対策

- (1) 基幹防除
 - ① 茎葉散布は出穂期とその7日後の2回を基幹防除として実施する。
 - ② ジノテフラン液剤またはエチプロール水和剤Fを使用する場合、基幹防除を出穂期7～10日後の1回散布に省略できる。
 - ③ 水面施用を実施する場合は、出穂期から7日後までに処理する。
- (2) 追加防除は、薬剤の使用時期や回数など使用基準を厳守し、以下のとおり実施する。
 - ① 散布予定日の2～3日前に水田内すくい取り調査（20回振り）を行い、割粃の少ない「きたくりん」および「吟風」では3頭、「きらら397」で2頭、割粃率の高い「ほしのゆめ」では1頭に達した場合に追加防除を実施する。その後も、同様の調査を行い、上記水準を下回るまで順次7～10日間隔で追加散布を継続する。
 - ② 水面施用を実施した場合には、出穂3週目にすくい取り調査を行い、上記に準じて追加防除を実施する。
- (3) 加害期間は水稻の黄熟期までであり、その後の防除は不要である。

フタオビコヤガ（第3回）	発生期：やや遅	発生量：やや少
---------------------	----------------	----------------

1. 発生経過と予報の根拠

- (1) 本種は高温少雨が続くと密度が高まりやすい。
- (2) 予察灯による第2回成虫の初発期は、比布町で6月29日（平年：6月26日）と平年よりやや遅く、北斗市で7月5日（平年：7月4日）と平年並だった。長沼町では誘殺は認められていない（初発

期平年：7月6日）。

- (3) 予察灯による第2回成虫の誘殺数は、いずれの地点でも平年より少なかった。
- (4) 予察田における第2回幼虫の被害葉率は、長沼町、北斗市では平年並で、比布町では平年より低かった。
- (5) 8月の気温は平年並で、降水量は平年よりやや多いと予報されている。
- (6) 以上のことから、第3回幼虫の発生期は平よりやや遅く、発生量は平年よりやや少ないと予想される。

2. 防除対策

- (1) 8月下旬に10株について幼虫被害を調査し、被害葉率が100%に達していなければ防除は不要である。

B. とうもろこし

アワノメイガ	発生量：やや少
--------	---------

1. 発生経過と予報の根拠

- (1) 北斗市の予察ほにおけるフェロモントラップによる誘殺数は、平年よりやや少なく推移している。
- (2) 以上のことから、発生量は平年よりやや少ないと予想される。

2. 防除対策

- (1) 発生には地域差があるので、当該地域における近年の発生状況を考慮して防除要否を判断する。
- (2) 防除ガイドに準拠し、標準的な露地栽培では雄穂抽出の前後に2回、7～10日間隔で茎葉散布を実施する。

C. 豆類

べと病（大豆）	発生期：既発（並）	発生量：並
---------	-----------	-------

1. 発生経過と予報の根拠

- (1) べと病は多雨や多湿時、密植や過繁茂で風通しが悪いときに多発する。
- (2) 予察ほ（長沼町）の「トヨムスメ」における初発期は7月8日（平年：7月9日）と平年並で、発生量は平年より少なく推移している。
- (3) 8月の気温は平年並で、降水量は平年よりやや多いと予報されている。
- (4) 以上のことから、発生量は平年並と予想される。

2. 防除対策

- (1) 黒大豆および抵抗性が“弱”の黄大豆、青大豆品種では、防除ガイドに準拠して薬剤散布を行う。それ以外の品種では防除の必要はない。
- (2) 要防除水準は、開花始めの上位葉の病斑面積率で2.5%（1小葉当たりの病斑個数約30個）である。

菌核病	発生期：やや遅	発生量：並
-----	---------	-------

1. 発生経過と予報の根拠

- (1) 菌核病は花卉感染が主体であり、開花期の日照が少なく多湿な場合に多発する。また、茎葉によって地表面がうっぺいされるほど子のう盤の形成が良好となる。
- (2) 予察ほ（芽室町）の菜豆「大正金時」における初発は認められていない（平年：7月26日）。
- (3) 8月の気温は平年並で、降水量は平年よりやや多いと予報されている。
- (4) 豆類の生育は大豆で平年よりやや遅れているが、小豆および菜豆では平年並である。
- (5) 以上のことから、発生期は平年よりやや遅く、発生量は平年並と予想される。

2. 防除対策

- (1) 開花時期に注意し、薬剤散布にあたっては、大豆では開花始めから10～15日後、小豆では7～10日後、菜豆では5～7日後に1回目の散布を行い、その後必要に応じて、10日間隔で計2～3回散布する。

灰色かび病	発生期：小豆：並、菜豆：遅
	発生量：やや多

1. 発生経過と予報の根拠

- (1) 灰色かび病は開花期以降の天候が低温で多湿な場合に多発する。また、過繁茂状態は本病の進展を助長する。
- (2) 予察ほ（長沼町）の小豆「しゅまり」（初発平年：8月4日）および予察ほ（芽室町）の菜豆「大正金時」（初発平年：7月21日）では未発生である。
- (3) 8月の気温は平年並で、降水量は平年よりやや多いと予報されている。
- (4) 以上のことから、発生期は小豆では平年並、菜豆では平年より遅く、発生量は平年よりやや多いと予想される。

2. 防除対策

- (1) 薬剤の散布時期、散布間隔、散布回数は菌核病に準ずる。
- (2) 耐性菌の出現を防ぐため、ローテーション散布を行う。
- (3) チオファネートメチル剤、フルアジナム剤およびジカルボキシミド系剤に対する耐性菌が認められているので、防除ガイドに準拠して適切な薬剤防除を実施する。

茎疫病（大豆・小豆）	発生量：やや多
-------------------	----------------

1. 発生経過と予報の根拠

- (1) 茎疫病は土壌が湿潤な条件で発生し、比較的気温が高い場合に多発する。なお、7月中旬以前に発病すると被害が大きくなる。
- (2) 8月の気温は平年並で、降水量は平年よりやや多いと予報されている。
- (3) 以上のことから、発生量は平年よりやや多いと予想される。

2. 防除対策

- (1) 転換畑や排水性の不良なほ場では排水対策を講じる。また、培土処理は本病の発病を軽減できる。
- (2) 開花期前半までの発病を抑えることを目安にし、発病前から予防的に薬剤散布する。発病後に薬剤散布しても効果がないので、気象情報により大雨が予想された場合はその前に散布する。

マメシンクイガ(大豆)	発生期：並	発生量：多
--------------------	--------------	--------------

1. 発生経過と予報の根拠

- (1) 近年は全道的に発生が多く、昨年も発生量は多かった。地域やほ場による差はあるものの、越冬密度は全般的に高いと推測される。
- (2) 予察ほにおけるフェロモントラップによる初誘殺は、比布町で7月18日（平年：7月15日）と平年よりやや遅く、芽室町で7月20日（平年：7月27日）と平年より早い。長沼町（平年：7月26日）、北斗市（平年：8月12日）、訓子府町（平年：8月7日）では誘殺が認められていない。
- (3) 8月の気温は平年並で、降水量は平年よりやや多いと予報されている。
- (4) 以上のことから、発生期は平年並で、発生量は平年より多いと予想される。

2. 防除対策

- (1) 大豆の莢の生育およびフェロモントラップによる成虫初発を観察し、薬剤の散布開始時期を決めると効果的に防除できる。大豆の莢の長さが2cmをこえ、加えて成虫の発生が確認されてから6日後をめどに合成ピレスロイド系剤を散布する。さらにその10日後に有機リン系剤を散布する。

アズキノメイガ（小豆・菜豆）	発生期：既発（早）	発生量：やや多
-----------------------	------------------	----------------

1. 発生経過と予報の根拠

- (1) 予察ほにおける前年の被害は、平年よりやや多かったことから、越冬密度も平年よりやや高いと推測される。
- (2) 予察灯による誘殺初発期は、長沼町で6月26日（平年：7月13日）、芽室町で6月30日（平年：7月15日）と平年よりも早かった。誘殺数は、長沼町ではやや多く、訓子府町では平年並、芽室町ではやや少ない。
- (3) 8月の気温は平年並で、降水量は平年よりやや多いと予報されている。
- (4) 以上のことから、発生量は平年よりやや多いと予想される。

2. 防除対策

- (1) 防除ガイドに準拠し、薬剤散布を実施する。

食葉性鱗翅目幼虫（大豆・小豆）	発生量：並
------------------------	--------------

1. 発生経過と予報の根拠

- (1) 予察ほにおける食葉性鱗翅目幼虫による被害程度は、長沼町の大豆では平年並で、小豆では平年よりやや高い。訓子府町の大豆では低く、小豆ではやや低い。
- (2) 8月の気温は平年並で、降水量は平年よりやや多いと予報されている。

(3) 以上のことから、発生量は平年並と予想される。

2. 防除対策

- (1) 大豆では開花期から莢伸長期に葉を食害されると最も収量に影響する。この時期の食害葉面積率が20%に達すると約5%の減収となる。
- (2) 大豆では、要防除水準（幼虫の密度が開花期頃に大豆1個体当たり2頭、莢伸長期以降に3頭）を超える場合には、防除ガイドに準拠して薬剤散布する。

D. ばれいしょ

疫病	発生期：既発（早）	発生量：やや多
----	-----------	---------

＜7月13日付け注意報第1号発表＞

1. 発生経過と予報の根拠

- (1) 疫病は18～20℃が最適温度とされており、曇雨天が続くとまん延する。
- (2) 予察ほの「とうや」における初発期は、長沼町では7月9日（平年：7月18日）、訓子府町では7月8日（平年：7月14日）と平年より早く、北斗市では7月5日（平年：7月9日）と平年よりやや早かった。芽室町では未発生である（平年：7月9日）。
- (3) 予察ほの「とうや」における発生量は、長沼町では平年より多く、訓子府町では平年並に、北斗市では平年より少なく推移している。
- (4) 7月3半旬の巡回調査では、空知、渡島、檜山、十勝およびオホーツク地方で発生が確認されており、このうち1地点では発病株率が30%と高かった。
- (5) 8月の気温は平年並で、降水量は平年よりやや多いと予報されている。
- (6) 以上のことから、発生量は平年よりやや多いと予想される。

2. 防除対策

- (1) 防除ガイドに準拠し、薬剤散布を継続する。
- (2) 本病の発生ほでは、収穫期の気温が低めに推移すると、疫病菌による塊茎腐敗が発生しやすいので注意する。
- (3) メタラキシル剤には全道で広く耐性菌が認められているので、薬剤の選択には注意する。

アブラムシ類	発生量：並
--------	-------

1. 発生経過と予報の根拠

- (1) 予察ほにおけるジャガイモヒゲナガアブラムシの発生量は、長沼町、芽室町で平年よりやや少なく、訓子府町で少ない。
- (2) モモアカアブラムシの発生量は、長沼町で平年並であった。芽室町および訓子府町では発生が認められていない。
- (3) ワタアブラムシの発生量は、長沼町、訓子府町で平年より多い。芽室町では発生が認められていない。
- (4) 7月3半旬の巡回調査によると、20複葉あたりの寄生虫数は最大でも19頭、多くの地点で0頭だった。
- (5) 8月の気温は平年並で、降水量は平年よりやや多いと予報されている。
- (6) 以上のことから、発生量は平年並と予想される。

2. 防除対策

- (1) 防除ガイドに準拠して薬剤散布を実施する。
- (2) アブラムシの種類によって薬剤の効果が異なるので注意する。
- (3) ワタアブラムシは下位葉に好んで寄生するので、薬液が十分にかかるよう散布する。

E. てんさい

褐斑病	発生期：既発（やや遅）	発生量：並
-----	-------------	-------

1. 発生経過と予報の根拠

- (1) 褐斑病は高温多雨条件で多発する。
- (2) 予察ほにおける初発期は、長沼町および芽室町の「あまいぶき」ではそれぞれ7月18日（平年：7月9日）、7月23日（平年：7月13日）と平年より遅かった。訓子府町の「リッカ」では7月4日（平年：7月11日）と平年より早かった。いずれの地点においても初発後の発病は平年より少なく推移している。

- (3) 7月3半旬の巡回調査では、胆振、上川、十勝およびオホーツク地方で発生が認められている。
- (4) 8月の気温は平年並で、降水量は平年よりやや多いと予報されている。
- (5) 以上のことから、発生量は平年並と予想される。

2. 防除対策

- (1) 薬剤の残効期間や天候などを考慮し、散布間隔が開きすぎないように注意しながら防除を継続する。
- (2) DMI剤低感受性菌およびQoI剤耐性菌が道内で確認されているため、これらの系統の薬剤の使用にあたっては特に注意し、QoI剤の散布後に防除効果が得られない場合には速やかに他系統の薬剤を散布する。また、耐性菌や低感受性菌の新たな発生を抑えるため、作用機作の異なる薬剤を組み合わせた体系防除を実施する。
- (3) 本病に特に罹病しやすい品種が栽培されている地域では本病の発生推移に注意する。

ヨトウガ(第2回)	発生期：やや早	発生量：並
------------------	----------------	--------------

1. 発生経過と予報の根拠

- (1) 予察ほのてんさいにおける第1回産卵初発期は平年よりやや早かった。
- (2) 予察ほのてんさいにおける第1回幼虫による被害は、長沼町では平年よりやや少なく、芽室町、訓子府町では平年より少ない。
- (3) 7月3半旬の巡回調査によると、被害株率は最大でも28%に止まっている。
- (4) 8月の気温は平年並で、降水量は平年よりやや多いと予報されている。
- (5) 以上のことから、第2回幼虫の発生期は平年よりやや早く、発生量は平年並と予想される。

2. 防除対策

- (1) 被害株率が50%に達したときを防除時期の目安とする。薬剤散布以降も被害が進展するときは追加防除を検討する。幼虫に対する薬剤の効果は令期が進むにつれて低下するので、散布適期を逸さないよう注意する。
- (2) IGR剤を使用する場合は、被害が認められる以前に予防的に散布すると高い防除効果が得られ、第2回幼虫を対象とする場合の散布時期は7月下旬頃から8月中旬頃である。

F. たまねぎ

ネギアザミウマ	発生量：並
----------------	--------------

1. 発生経過と予報の根拠

- (1) 本種は高温少雨条件が続くと密度が高まりやすい。
- (2) 予察ほにおける発生量は、訓子府町では平年並で、長沼町では平年より少ない。
- (3) 7月3半旬の巡回調査によると、石狩、オホーツク地方の一部に発生量が多い地点が認められた。
- (4) 8月の気温は平年並で、降水量は平年よりやや多いと予報されている。
- (5) 以上のことから、発生量は平年並と予想される。

2. 防除対策

- (1) 道内の広い範囲で合成ピレスロイド剤抵抗性個体群が確認されているため、本系統剤の使用を避ける。

各地でネギハモグリバエが発生しています

7月下旬現在、空知、石狩および上川地方のたまねぎほ場でネギハモグリバエの被害が確認されており、空知地方の一部地域では多発ほ場もみられています。第1回幼虫の被害は6月上旬以降に、第2回幼虫の被害は7月上旬頃からはじまっています。

過去2年に渡って、たまねぎの商品価値を損ねるりん茎の被害が認められています。この被害は、7月中に葉を加害した幼虫がりん茎に食入することによって生ずるものと考えられています。りん茎への食入時期など、加害の詳細は明らかにされていませんが、今後も注意が必要と考えられます。

本種に対する防除は、幼虫被害が進んでからは効果が得られにくいため、成虫の発生が認められた時点で早めに薬剤散布を実施します。ネギハモグリバエの成虫食痕は、縦に並んだ白い点状の食痕が特徴的です。ほ場をよく観察して早期発見に努めましょう。

幼虫食痕、成虫食痕の写真を、北海道病害虫防除所ホームページの「発生にかんがみ注意すべき病害虫 特に注意を要する病害虫」(URL <http://www.agri.hro.or.jp/boujoshou/chui/26chui.htm>)に掲載しています。たまねぎりん茎への幼虫被害の写真は、「新たに発生した病害虫(2013年度)」(URL <http://www.agri.hro.or.jp/boujoshou/sinhassei/html/H25/25-12.htm>)に掲載しています。

G. あぶらな科野菜

軟腐病 発生量：やや多

1. 発生経過と予報の根拠

- (1) 軟腐病は、高温多雨条件で発生が多くなる。
- (2) 8月の気温は平年並で、降水量は平年よりやや多いと予報されている。
- (3) 以上のことから、発生量は平年よりやや多いと予想される。

2. 防除対策

- (1) 多室素栽培を避ける。
- (2) 防除ガイドに準拠して薬剤の予防散布を行う。
- (3) だいこんでは、播種25～30日後に1回目の薬剤散布を実施する。
- (4) 耐性菌の出現を防ぐため、同一系統の薬剤を連用しない。また、オキシリニック酸剤の低感受性菌が出現している地域があるので注意する。

モンシロチョウ 発生量：やや多

1. 発生経過と予報の根拠

- (1) 予察ほのキャベツにおける幼虫数は長沼町で平年より多く、北斗市で平年並である。
- (2) 8月の気温は平年並で、降水量は平年よりやや多いと予報されている。
- (3) 以上のことから、発生量は平年よりやや多いと予想される。

2. 防除対策

- (1) 成虫の飛来および産卵の多いほ場では、防除ガイドに準拠して薬剤散布を行う。
- (2) 防除にあたっては、他害虫の発生も考慮して、効率的な防除体系を組み立てる。

コナガ 発生量：やや多

1. 発生経過と予報の根拠

- (1) 予察ほのフェロモントラップにおける誘殺数は、長沼町、芽室町および訓子府町で平年並、北斗市でやや多い。
- (2) 予察ほのキャベツにおける幼虫の発生量は、長沼町で少なかったが7月中旬に増加した。北斗市では平年並に推移している。
- (3) 7月3半旬の巡回調査によると、食害程度は石狩、空知地方で20を超える地点が認められ、6月6半旬から増加傾向にある地点が散見される。
- (4) 8月の気温は平年並で、降水量は平年よりやや多いと予報されている。
- (5) 以上のことから、発生量は平年よりやや多いと予想される。

2. 防除対策

- (1) 本種は薬剤抵抗性が発達しているので、防除ガイドに準拠し、異なる系統のローテーション散布を行う。
- (2) 防除にあたっては、他害虫の発生も考慮して、効率的な防除体系を組み立てる。

ヨトウガ(第2回) 発生期：やや早 発生量：並

てんさいのヨトウガの項を参照。

オオタバコガの発生に注意しましょう

オオタバコガは道外から成虫が飛来し、幼虫が各種作物を加害します。本年は6月上旬に道南でフェロモントラップへの誘殺が認められました。その後、7月3日以降、道南地域の複数地点で誘殺が認められています。また、7月中旬には道央の長沼町でも誘殺が確認されています。オオタバコガは世代を重ねるにつれ個体数が増加する傾向があるとされているので、今後被害が大きくなる可能性があります。

フェロモントラップにより誘殺が確認されたら、早めの薬剤防除を実施しましょう。また、誘殺が認められていない地域でも、果菜類、花き類、結球野菜等のオオタバコガの被害を受けやすい作物では特に注意して下さい。

幼虫は果実や蕾に潜入して加害するため、薬剤防除の効果を上げるには幼虫の潜入前の産卵時期頃に薬剤散布する必要があります。被害が確認された場合は、被害部位を放置せずに幼虫ごとほ場から持ち出し適切に処分し、すみやかに薬剤防除を実施しましょう。また、本種は各種薬剤に対し感受性が低いので、薬剤選択にあたっては注意が必要です。

道内各地のオオタバコガのフェロモントラップ誘殺状況は北海道病害虫防除所ホームページの「病害虫速報」に掲載しています。(URL <http://www.agri.hro.or.jp/boujoshou/>)。

H. りんご

黒星病	発生期：既発（やや早）	発生量：並
-----	-------------	-------

1. 発生経過と予報の根拠

- (1) 黒星病は平均気温 15～20℃で降雨が多い場合に多発する。
- (2) 発生量は、長沼町の予察園では平年並に推移している。余市町の予察園（慣行防除あり）では発生が認められていない。
- (3) 7月3半旬の巡回調査では発生は認められていない。
- (4) 8月の気温は平年並で、降水量は平年よりやや多いと予報されている。
- (5) 以上のことから、発生量は平年並と予想される。

2. 防除対策

- (1) 防除ガイドに準拠して、薬剤散布を継続する。特に葉に発病が認められている場合は、果実への感染を防ぐため、十分量の薬液を丁寧に散布する。

斑点落葉病	発生量：並
-------	-------

1. 発生経過と予報の根拠

- (1) 斑点落葉病は夏期の高温多湿条件で多発しやすい。
- (2) 発生量は、長沼町の予察園では平年よりやや少なく推移している。余市町の予察園（慣行防除あり）では発生が認められていない。
- (3) 7月3半旬の巡回調査では渡島および留萌地方で発生が認められている。
- (4) 8月の気温は平年並で、降水量は平年よりやや多いと予報されている。
- (5) 以上のことから、発生量は平年並と予想される。

2. 防除対策

- (1) 防除ガイドに準拠して、黒星病との効率的な防除に対応し、薬剤散布を継続する。
- (2) デリシャス系等の感受性品種を栽培している場合には発生に注意し、適切な防除を行う。

ハマキムシ類	発生量：やや少
--------	---------

1. 発生経過と予報の根拠

- (1) 長沼町（無防除）、余市町（慣行防除あり）の予察園のフェロモントラップによる誘殺数は、りんご

- コカクモンハマキ、リンゴモンハマキともに平年よりもやや少ない。
- (2) 8月の気温は平年並で、降水量は平年よりやや多いと予報されている。
 - (3) 以上のことから、発生量は平年よりやや少ないと予想される。

2. 防除対策

- (1) 防除ガイドに準拠して薬剤散布を行う。

モモシンクイガ	発生量：やや多
----------------	----------------

1. 発生経過と予報の根拠

- (1) 全道的に昨年の発生量がやや多かったことから、越冬密度はやや高いものと推察される。
- (2) 予察園のフェロモントラップにおける誘殺数は、長沼町（無防除）および余市町B（慣行防除あり）では平年よりも少なく、余市町A（慣行防除あり）では平年並に推移している。
- (3) りんご果実の生育が早かった影響で、長沼町の予察園における産卵数は平年よりやや多く、被害果率は高い。
- (4) 8月の気温は平年並と予報されている。
- (5) 以上のことから、発生量は平年よりやや多いと予想される。

2. 防除対策

- (1) 防除ガイドに準拠して薬剤散布を行う。

ハダニ類	発生量：少
-------------	--------------

1. 発生経過と予報の根拠

- (1) ハダニ類は高温少雨条件が続くと密度が高まりやすい。
- (2) 長沼町（無防除）および余市町の予察園（慣行防除あり）におけるハダニ類の発生量は、平年より少なく推移している。
- (3) 8月の気温は平年並で、降水量は平年よりやや多いと予報されている。
- (4) 以上のことから、発生量は平年より少ないと予想される。

2. 防除対策

- (1) 高温乾燥条件が続くときには発生状況に注意し、必要に応じて薬剤散布を実施する。
- (2) 同一系統の薬剤を連用すると薬剤抵抗性の発達が急速に進むので、防除ガイドに準拠して適正な防除を行う。

キンモンホソガ	発生量：やや少
----------------	----------------

1. 発生経過と予報の根拠

- (1) 予察園のフェロモントラップにおける誘殺数は、長沼町（無防除）で平年並で、余市町（慣行防除あり）では平年より少ない。被害は長沼町では平年よりも少なく、余市町では平年よりやや多い。
- (2) 8月の気温は平年並で、降水量は平年よりやや多いと予報されている。
- (3) 以上のことから、発生量は平年よりやや少ないと予想される。

2. 防除対策

- (1) 防除ガイドに準拠して薬剤散布を行う。

農薬による蜜蜂への被害に注意しましょう！

- 水稻の開花期である7～9月は、多くの養蜂家が道内各地に移動してきており、その中で水田の周辺に蜂場を設置して養蜂が行われている場合があります。

国の調査結果では、蜜蜂被害は水稻の開花期に多く、カメムシ防除に使用する殺虫剤を直接浴びたことが、原因の可能性があると考えられています。

このため、これから水稻のカメムシ防除の時期となってきますので、次の点に留意して適切な防除対策を進めてください。

- ① 蜜蜂は水稻開花期に周辺の水田に飛来しており、その際、カメムシ防除のための殺虫剤の暴露により被害が生じる可能性があります。
- ② 関係機関や農業団体等は、蜂場の設置場所及びその周辺の水田の農薬散布計画等の情報を相互に共有し、得た情報を養蜂家、周辺の水稲農家に伝え、注意喚起しましょう。
- ③ 養蜂家は、蜜蜂がカメムシ防除の殺虫剤に暴露する確率が高い場所には、できるだけ巣箱の設置を避けるか、水稻の開花期に巣箱を退避させましょう。
- ④ 水稻農家においても、養蜂家と協力して、蜜蜂の活動が盛んな時間帯の農薬散布を避けたり、蜜蜂が暴露しにくい形態の農薬(粒剤等)を使用するなど、地域の実態に合わせて取り組んでください。

6月15日～8月31日は**農薬危害防止運動**実施期間です！

北海道では、農薬の使用に伴う事故・被害を防止するため、農薬の安全かつ適正な使用や保管管理、環境への影響に配慮した農薬の使用等を推進するため、農薬を使用する機会が増える6月から8月を期間として、**「農薬危害防止運動」**を実施します。

■ 農薬使用に関する注意事項

- 農薬は、農薬取締法に定められた事項が表示されたもの、または特定農薬に該当するものを選び、有効期限内に使い切れる量を購入する。
- 農薬のラベルに記載されている適用作物、使用時期、使用方法等を読んで、十分理解し、表示された濃度や使用量等を守り、必要量以上に農薬を調製しない。
- 散布作業前日は、飲酒を控え、十分な睡眠をとる。体調の優れない、または著しく疲労しているときは、散布作業に従事しない。
- 農薬の使用前には、防除器具等を点検し、十分に洗浄がなされているか確認すること。また、農薬の使用後には、防除器具の薬液タンク、ホース、噴頭、ノズル等農薬残留の可能性がある箇所に注意して、洗浄を十分に行うこと。
- 農薬を散布するときは、必要に応じ、あらかじめ、周辺住民等の関係者に連絡し、立札を立てるなど、関係のない者が作業現場に近づかないよう配慮する。
特に、有人ヘリや無人ヘリで防除する場合は、学校や病院等の公共施設及び近隣の住民等に対し、実施予定日時、区域、薬剤等についての周知に努める。
- 農薬の飛散による危被害を防止するため、近隣の住民、飼育されている家畜及び河川等の周辺環境への影響に注意する。
特に、有人ヘリや無人ヘリで薬剤散布する場合は、有機農産物が生産されているほ場等に農薬が飛散しないよう注意する。
- 農薬の調製及び散布作業中は、マスク、手袋、眼鏡等を着用し、体を防護する。
- 散布作業後は、よくうがいをし、手や顔などの露出部だけでなく入浴し全身を十分洗う。



■ 農薬に関してお問い合わせは

道庁農政部生産振興局技術普及課（TEL:011-231-4111(内線)27-838)

北海道病虫害防除所（TEL0123-89-2080）

または最寄りの総合振興局・振興局農務課にご照会ください。

登録情報や農薬取締法等について、農林水産省ホームページの「農薬コーナー」(<http://www.maff.go.jp/nouyaku/>)をご覧ください。

付記

北海道地方 3か月予報 (8月から10月までの天候見通し)

平成27年7月24日
札幌管区气象台発表

<予想される向こう3か月の気候>

向こう3か月の出現の可能性が最も大きい天候と、特徴のある気温、降水量等の確率は以下のとおりです。

8月 天気は数日の周期で変わりますが、平年に比べ晴れの日が少ないでしょう。降水量は、平年並または多い確率ともに40%です。

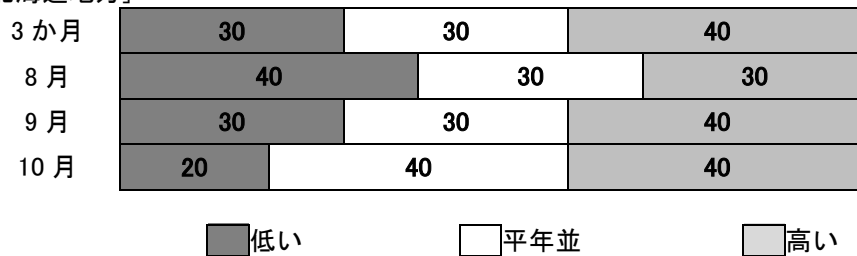
9月 天気は数日の周期で変わりますが、平年に比べ晴れの日が多いでしょう。降水量は、平年並または少ない確率ともに40%です。

10月 天気は数日の周期で変わるでしょう。北海道日本海側では、期間の後半は、平年と同様に曇りや雨の日が多い見込みです。北海道オホーツク海側・太平洋側では、平年と同様に晴れの日が多いでしょう。気温は、平年並または高い確率ともに40%です。

<向こう3か月の気温、降水量の各階級の確率(%)>

<<気温>>

[北海道地方]



<<降水量>>

[北海道地方]

